

学生の頃、「福祉の仕事をしたい」「人の役に立ちたい」という思いから福祉の道に入りました。しかし、できれば高齢者介護の仕事を心のどこかで避けていたように思う。福祉の仕事をしたいと思っていたにも関わらず…。

今思えば、特に排泄介助の臭い、汚いというイメージが強くあったのではないかと思います。

しかし、知人の紹介で高齢者介護の仕事に就くことになった。仕事を始めた頃は、仕事を覚えるので精一杯で、他に考えるような余裕がなかった。

ある時、一人の女性高齢者の方のオムツ交換をすることになった。自分は早く済ませようと思いながら交換していると、「汚いことさせてごめんね…」とぼつりと声が聞こえた。

申し訳なさそうに…、その時は「いいですよ、大丈夫ですからね。」と答えたが、しばらくしてから女性高齢者の方はどんな気持ちで自分に話したのだろうか？と思った。本当は自分でトイレに行きたいけど行けない、自分で交換したくても出来ない、本当は他人には見せたくないはずなのに…。

「介護」とは介助することではなく、“護る”ことではないかと思う。

誰もが高齢になると、今まで一人で出来ていたことが出来なくなり、想いを伝えようとしても上手く伝えることが難しくなったり…色々な意味で誰かの助けが必要になってくる。それは、特別なことではなく、誰もが辿る道であると思う。

いつしか自分がつまづき、一人では何も出来なくなり途方に暮れている時、笑顔で優しい言葉で、そっと温かい手を差し伸べられたら…。とても嬉しくなると同時に、一人ではないんだと心まで温かくなると思う。

知識や介護技術は後からでも身につけることが出来ます。

まず大切なことは、人のためになろう、今目の前にいる人は何を想っているのだろうか？

どんな気持ちでいるのだろうか？と考え、寄り添うことだと思います。

このように想える仕事は、介護の仕事でしか味わえないのではないのでしょうか？

今では高齢者の介護に就いて良かった、と心から思っています。